欲望する子どもたち

――「小さな王国」論――

小仲信孝

I

そのいかがわしさは、たしかにただものではなかった。転校生の沼倉庄吉は瞬く間に他の生徒たちを手なずけ、担任の貝島が気づいたときにはすでに、級中の勢力地図まで完全に塗り替えてしまっていたのである。それだけでも尋常ではないところへもってきて、この転校生の得体の知れなさは、底なしにまだまだ続く。腕力では劣るにもかかわらず、これまで餓鬼大将だった西村を差し置いて「級中の覇者たる位置」を占めた沼倉は、やがて貝島でさえ手の出せない絶対的な権力構造を構築してしまう。「沼倉共和国」である。自ら大統領に就任して法律として君臨し、級友たちを手足とした上に、「沼倉」の判を捺した紙幣を発行するに至って、それは「名実ともに学校や社会から独立した一つの支配の体系」(1)となっていたのである。

いわばこの偉業＝既存の秩序の「変換」(2)を成し遂げたのがたった一人の転校生であったことに、驚かない訳にはいかないだろう。というより、沼倉がまだ小学五年生であったことを考えれば、むしろその異能ぶりを讃えるまえに、そのいかがわしさに眉を顰めたくなるのではあるまいか。前田愛の評言を借りれば「クラスの中にいわば小さな反国家を作り出」(3)した沼倉少年。子どもが無垢な存在であると同時に、ときには大人以上に邪悪な存在になることは、紛れもない事実である。だとしても、子どもの中に両義性を見出す大人たちは、自らの邪悪さから遁れられないがゆえに、子どもの無垢への期待を捨て切れずにもいるだろう。そうした大人たちの淡い期待を沼倉は、ものの見事に裏切ってみせたのだ。「反国家」建設という裏切りの性質からいっても、いかがわしさは動かない。二十年近い教師経験を誇っていた貝島昌吉にとっても、沼倉ははじめて出会った〈恐るべき子ども〉であったにちがいない。

なぜか彼には沼倉と云ふ子供が叱りにくいやうな気がした。何だか斯う、子供で居て子供でないやうな、煙つたい人間のやうに感ぜられて、叱るのが気の毒でもあれば不躾でもあるかの如く思は

れたのであつた。

貝島が内心、「憂鬱な眼つき」の沼倉に子どもらしからぬ、いうなればある胡散臭さを嗅ぎとっていたのは、間違いではなかったのである。

テクストの中から、沼倉のいかがわしさをもう少し具体的に見ておこう。貝島が沼倉の邪悪な素顔を知るきっかけとなった事件がある。そこでは沼倉の、子どもにあるまじき異能ぶりが遺憾なく発揮されていた。

ある日、修身の時間に「二宮尊徳の講話」を聞かせていたときのこと、静まりかえった教室の片隅で「誰かゞひそ〳〵と無駄話をして居るのが、微かに貝島の耳に触つた」。話の腰を折られた貝島が不快に耐えながら観察していると、犯人は間違いなく沼倉である。当然、貝島は厳しく叱責するが、しかしながら返ってきた沼倉の反応は実に意表をつくものであった。

「沼倉！　お前だらう先からしやべつて居たのは？　え？お前だらう？」

「いいえ、僕ではありません。……」

沼倉は憶する色もなく立ち上がつて、かう答えながらずつと自分の周囲を見廻した後、

「先から話をして居たのは此の人です」

と、いきなり自分の左隣に腰かけて居る野田と云ふ少年を指さした。

野田は「平生から温厚な品行の正しい生徒」である。名指しされた瞬間のとまどいの表情からしても、犯人でないことは明らかだった。つまり、沼倉は自分の非を認めようとしないばかりか、他人に罪をなすり付けようとしていたのである。

が、貝島を本当に驚かせたのは、野田が非を認めたばかりでなく、激昂する貝島に他の生徒たちまでが沼倉を庇いたて、次々と罪を買って出たことにほかならなかった。

「先生、沼倉さんを立たせるなら僕も一緒に立たして下さい」

かう云つたのは、驚いた事には級長を勤めて居る秀才の中村であつた。

「何ですと？」

貝島は覚えず呆然として、摑んで居る沼倉の肩を放した。

「先生、僕も一緒に立たせて下さい」

つゞいて五六人の生徒がどや〳〵と席を離れた。その尾について、次から次へと殆ど全級残らずの生徒が、異口同音に「僕も僕も」と云ひながら貝島の左右へ集まつて来た。彼等の態度には、少しも教師を困らせようとする悪意があるのではないらしく、悉く西村と同じやうに、自分が犠牲になつて沼倉を救はうとする決心が溢れて見えた。

この貝島を狼狽させ、と同時に「沼倉と云ふ少年が持つて居る不思議な威力」を余すところなく知らしめることになった事件の真相は、貝島の息子である啓太郎が伝えている。クラスの覇権をほぼ掌握しか

けていた沼倉は、自分の部下たちが「どれほど自分に心服して居るか」を試すために、意図的に事件を起こしたのだという。

沼倉のいかがわしさを知るには充分であろう。彼の恐ろしさは修身の時間を狙い撃ちしていることを、まず指摘しなければならない。普段は生徒にやさしく、「慈愛に富んだ態度」で接している貝島が、「修身の時間に限つて特別に厳格にする」ということを知っていて、つまり貝島にとって修身の時間がある神聖さを伴う時空であることを承知の上で、いわばその神聖さを逆手にとって、大胆にも部下たちの忠誠度を測る首実験を敢行していたのである。

しかも、ことの真相を知った貝島は自分が踏み絵にされたことも忘れ無邪気にも、まさに無邪気にも「級中の覇者」として絶大なる信頼を集めている沼倉に感心し、「今後大いに沼倉を学ばなければならない」と教師としての不明を恥じてさえいたのである。「老練」な教師を自負する貝島を眩惑することも沼倉には可能だった。すくなくとも、このときの貝島は、沼倉の恐るべき素顔にまったく気づいてはいなかったのだ。それというのも、沼倉という少年がこれまでの経験則からは理解できない、貝島の抱く子どもの概念を大きく逸脱した存在だったからにちがいない。その意味でも沼倉は、異質性の際立った子どもであるといえよう。

だが、沼倉という少年に関して大切なことは、その非―子ども性や邪悪な肖像を確認することではないだろう。邪悪な横顔をもっているとはいえ、それはあくまで大人のまなざしが捉えたものにすぎないともいえる。子どもたちにとっての沼倉は、どのような存在だったのか。僅かの時間に同級生の心を掴んでしまった沼倉である。子どもたちの眼には輝やかしい存在と見えていたはずである。したがって大切なことは、沼倉がなぜ多くの子どもを魅了することができたのか、その輝きの謎を解読することにほかならない。そしてそれは同時に、沼倉とはつまり何者なのか、その隠された記号性を解明することにもなるだろう。

Ⅱ

「沼倉共和国」の政治システムは、一種の恐怖政治であった。貝島が沼倉の「不思議な威力」――まれに見る感化力を利用して生徒たちを「善導」しようとしたことが裏目に出て、いつしか沼倉は貝島を差し置いて闇の支配力を行使するまでになっていた。すなわち、同級生の日常生活の隅々にまで監視の網を張りめぐらし、行動のすべてを把握した上、たとえば出席、欠席、遅刻、早退についてはその理由が本当かどうか、「探偵」まで任命して調べさせていたのである。もちろん、違反者には厳しい懲罰が待っている。

だが、沼倉の支配はこれに止まるわけではない。さらに権限が拡大していくのだ。

罰則の種類がだん〳〵殖えて来るに従つて、制裁の方法も複雑に探偵の人数も増すやうになつた。しまひには探偵以外に、いろ〳〵の役人が任命された。先生から指名された級長は其方除けにされ

て、代りに腕力のあるいたづら者が、監督官に任ぜられる。出席簿係り、運動具係り、遊戯係り、と云うやうな役も出来る。大統領の沼倉を補佐する役が出来る、その副官が出来る、高官の用を足す従卒が出来る。役人のうちでも一番位の高いのは、副統領であつて、此れは二人の従卒を使つて居た。優等生の中村と鈴木とは、始めのうちは性質が惰弱な為めに軽蔑されて居たけれど、次第に沼倉から尊敬されて、後には大統領の顧問官になつた。

こうして成立したのが、いわゆる「沼倉共和国」なるものだったのだ。貝島からクラスの「善導」を託されたのをいいことに、自分に「心服」している部下たちの心理を巧みに操作しながら、沼倉は大統領として君臨できる強固なヒエラルキーを築き、絶対的な支配権を握ったのである。沼倉はどちらかというと目立たない部類の生徒である。クラスの中で体力の面でも学力の面でも優位に立つわけではない。にもかかわらず、「級中の覇者」から貝島も介入できないほどの絶対の存在にのし上ることができたからくりが、ここにある。

が、不思議なことに部下たちは沼倉の専制を恐れてはいない。恐れるどころか、むしろ「みんなが大統領の善政（？）を謳歌して居る」という。彼らにとって専制的被支配に勝る魅力があったからだ。「沼倉共和国」の経済システムがそれである。「共和国」では任命された役ごとに「俸給」が支給されており、「両親から小遣ひを貰つた者は、総べて其の金を物品に換へて市場へ運ばなければならない」という法律を沼倉が制定したおかげで、親の経済力に関係なく、誰でもがさまざまな物品を手に入れることが可能だった。「貧乏な家の子供」たちにしてみれば、これほど歓迎すべき制度はあるまい。数の上ではおそらく多数を占めるであろう、さほど裕福でない家庭の子どもたちが沼倉の政策を支持したのは当然であったろう。また、はじめのうちは一方的に物品を市場に提供する側に廻されていた、裕福な家庭の子どもたちの不満も解消していく。次々と物品が「転売」されていく結果として「沼倉共和国の人民の富は、平均化されて行つた」からにほかならない。「沼倉共和国」の市場経済は富の分配、平均化という意味では充分に機能していたようである。

ところで、このような経済システムをめぐっては共産主義思想の影響がしばしば指摘されている。吉野作造「時論――我国現代の社会問題――」（「中央公論」大7・10）が共産主義の経済統制との類似性をいち早く感じ取っていたのをはじめとして、「簡単に言えば、この作品は少年の世界に形を借りたところの、統制経済の方法が人間を支配する物語り」と規定した伊藤整の「解説」[(4)]、最近のものでは「私有財産を否定してそれを共同体全体の富とみなし、その富を平等に分配することによって貧富の差を平均化しようとする共産主義的経済体制との類似点が指摘できる」と明言する渡辺まさひこ「谷崎潤一郎『小さな王国』論」[(5)]などが挙げられる。この作品が発表された当時の状況――前年十二月のロシア革命、第一次世界大戦の終結、そしてまさにこの年の出来事としての物価高騰の嵐――こうした社会情勢を踏まえれば、作者谷崎潤一郎が共産主義思想をどこかで意識していたとしても

不思議ではない。事実、谷崎は「幼少時代」の中で沼倉庄吉のモデルが小学校時代の同級生「のつさん」であったことを明らかにし、

いろ〳〵と実際にはなかつたことや誇張したことが書いてあるけれども、沼倉が級中の覇権を握つて何十人かの同級生にスターリン的威力を振るつてゐた有り様は、正しく「のつさん」そのまゝなのである。（傍点引用者）

と語ってもいる。

だとしても、〈小さな王国〉に成立したある種の統制経済の形をもって谷崎が社会批判を意図していたかどうか、過大評価は危険であろう。「沼倉共和国」の経済システムを詳細に検証していくと、宗像和重が指摘するように「それほど切実な社会批判が企てられているとは思われない」[6]のである。

「沼倉共和国」はまやかしのうえに成り立っている。たしかに富の平均化が図られているとはいっても、それは本来的な意味での富の平等を実現したわけではないからである。ひとたび「共和国」の外側に目を転じてみるがいい。たとえば、沼倉の場合。最近になってM市の製糸工場へ「東京から流れ込んで来たらしい職工の伜」である彼は、「共和国」の中では誰よりも豊かな富を享受することが可能だったかもしれないが、そのことが現実の生活にどれだけ反映していただろうか。石塚裕道『東京の社会経済史』（紀伊国屋書店、昭52・12）によると米騒動前後の民衆生活の窮迫はひどい状況で、東京の「重要品卸売物価の平均指数」は第一次世界大戦が開始された大正三年からの四年間で「二倍余り」に跳ね上がっている。それに対して労働者の平均賃金は「六割近くあがったにすぎなかった」という。こうした厳しい経済環境の中、おそらくは食いつめて東京を避難してきたのであろう沼倉の家庭が、生活環境の劣悪さから脱出していたとは想像しにくいし、まして「沼倉共和国」を建設したことが何らかの貢献をしていたとも見えないのである。

事情は啓太郎も同じことだろう。沼倉から「特別の庇護」を受けて大臣級の資産に恵まれていた彼は、祖母に気づかれるまでにも「色鉛筆だの餅菓子だの扇子だの」たくさんの品物を手に入れていたらしいが、それが貝島家の窮乏を救うのに役立った気配はまったくない。むしろ窮乏は、妻が病の床について以来ひどくなる一方であった。

「沼倉共和国」がユートピアであるというのは、ある意味では正しい。子どもたちの世界に限定するなら、たしかに富の平均化・平等化を実現している。ただし、貧困からの解放という意味でなら、正しくない。[7]多くの子どもたちが直面せざるを得ない苦境に対して根本的な解決策となってはいないからである。かりにユートピアと評価できるとすれば、そして渡辺まさひこのいうように「当代の経済体制に対する痛烈なアンチテーゼたり得ている」[8]のであればなおのこと、現実問題としての貧困を改善する方向性を、すくなくとも示唆している必要がある。だが、「沼倉共和国」の統制経済はそこまで視角を開いているわけではないのだ。外の現実は完全にネグレクトしてしまっている。その意味で〈砂上のユートピア〉という以上の評価を与えるのは控えた方が

よさそうである。

その証拠として、平均化された富の内容を確認しておこう。子どもたちが市場で売買したのは、次のような品々であった。

西洋紙、雑記帳、アルバム、絵ハガキ、フイルム、駄菓子、焼芋、西洋菓子、牛乳、ラムネ、果物一切、少年雑誌、お伽噺、絵の具、色鉛筆、玩具類、草履、下駄、扇子、メタル、蝦蟇口、ナイフ、万年筆

ほかにも沼倉が裕福な家庭の子どもから買い取った「大正琴」や「空気銃」などがあったが、これらの品物を見て気づくのは、半数近くが贅沢品であることだ。「田舎町の生活誌」と副題の付いた古島敏雄『子供たちの大正時代』（平凡社、昭57・5）が伝える子どもの生活風景と比較すると、「沼倉共和国」の子どもたちの贅沢ぶりがよくわかる。大正元年生まれの古島の生家は、長野県飯田市で診療所を開いていた。したがって比較的恵まれた経済的環境に育ったはずだが、遊びといえば自然と戯れることが主で、遊び道具としては竹鉄砲、お手玉、兵隊将棋など質素なものばかりである。大正琴も空気銃も買い与えられてはいない。もちろん家庭環境の違いや地域差も考慮しなければならないが、それにしても「沼倉共和国」の子どもたちが売買していたのは遊び道具に限らず、生活必需品というより嗜好品や贅沢品が目立つのではあるまいか。大正琴は大正四年に発明されたばかりのものであったし[9]、万年筆は小学校教員の初任給が十二円～二十円のときに一円八十銭～四円五十銭もしていたのである（大正七年の比較[10]）。沼倉にしても啓太郎にしても、それぞれの家庭の生活レベルからすれば高嶺の花の品物を手にしていたことに間違いない。

子どもたちにとって「沼倉共和国」がユートピアであった理由があるとすれば、まさしくこれである。現実の世界では、子どもたちの生活は親の経済力の束縛から逃れられない。しかし、「共和国」の内部ではあらゆる〈モノ〉が市場に流通することによって情報化し、富に恵まれた家庭の子弟しか享受できないはずの〈贅沢〉でさえ、誰でもが手の届くものになっているのである。したがってそこでは、物質欲を抑制する必要はない。誰もが平等に欲望する人間になれるのだ。

欲望の解放――沼倉は自ら欲望する人間と化して実践し、啓太郎のような貧困家庭の子どもたちが覚えるだろう、〈贅沢〉に対する倫理的なうしろめたさを払拭したのである。沼倉が子どもたちの英雄になることができた本当の理由は、そこにあったと考えるべきではなかろうか。

Ⅲ

「小さな王国」が貝島昌吉と沼倉庄吉との間の、二人の「ショウキチ」の「役割交換」のドラマであることを示唆したのは宗像和重である[11]。子どもの心理の隅々まで掌握していると自負していた貝島が、沼倉の出現によって教育者としての自我を完全に砕かれ、ついにはかつてのプライドをかなぐり捨てて沼倉の前に拝跪することになる結末から考えて、たしかに興味深い指摘にちがいない。ただ、ひとつ気になるの

は役割交換の意味であって、貝島が生活苦ゆえに沼倉の「家来」になろうとしたことから、教師と生徒の立場の逆転を読み取っただけでは不十分に思われるのだ。二人の「ショウキチ」の役割交換をどう意味づけるのか――この問題はおそらく、「小さな王国」という作品を解読する上でのキーポイントになるだろう。

貝島と沼倉の役割交換といえば、それを象徴する事件があったことを思い起こしたい。いうまでもなく、沼倉が授業中に部下たちの忠誠心を試そうとした、あの事件である。すでにこの時、二人の間で勝敗は決していたともいえ、その意味で重要な事件だが、この事件をもう一度別の角度から検証してみることにしよう。

普段は温厚な貝島が、この日はいつになく激しい怒りの感情を露にした。そして執拗であった。なぜだったのだろうか。表面的には、集中を乱されたせいであったといえよう。この日は「うらゝかな朝の日光が教室の窓ガラスからさし込んで、部屋の空気がしーんと澄み渡つて居るせゐか、生徒の気分も爽やかに引き締まつて居るやうであつた」ので、貝島は「不断よりは力の籠つた弁舌で、流暢に語り続けて居る」ところだったのである。

が、それだけではなさそうだ。修身の時間であったこと、そして何よりも「二宮尊徳の講話」の最中であったことと深い関わりがあるのではなかろうか。貝島昌吉の人生行路を振り返ってみると、彼にも立身出世を夢見た日があった。「旧幕時代の漢学者であつた父の遺伝」で幼少から学問好きであった貝島は、「学問で身を立てよう」と苦しい家計の中から父の反対を押し切って「お茶の水の尋常師範学校」へ進学している。卒業と同時に小学校教師の道を選んだ頃は「行く末は文学博士」との希望にも燃えていたが、父の死、家庭生活の不如意と続くうちに日常性に埋没し、「いつしか立身出世の志を全く失つた」のだという。しかし、かといって自堕落な暮らしをしてきたかといえば、小学校教師としての貝島は立派に着実にその地歩を固め、M市に移住する以前は「月俸四十五円の訓導」にまで〈出世〉していた。

生徒たちに対しても誠実な教師であったことは、知らぬ間に沼倉が「級中の覇者」となっていた事実を知らされたときに、驚き呆れると同時に教師として率直に反省をしていたことが証明していよう。それだけ逆にいえば、教師という職業に矜りを持っていたのであり、秘かに「老練」さを自負していたのも故なしとはしないのである。

こうした貝島の生の軌跡には、見田宗介のいう「金次郎主義」[12]の影が見え隠れしている。「金次郎主義」とは、社会的な出世の階段を登るだけが出世ではなく、たとえば〈日本一の農民〉〈日本一の旋盤工〉というようにその位置で日本一になることも出世であるという考え方であり、「事実面でのエリートと庶民の不平等を観念的に倒錯し、庶民の不満や失意の反体制エネルギーへの転化を食いとめ、それ以上にそのエネルギーを体制の目標達成へ水路づけていく機能をはたした」[13]といわれている。夢の実現を断念して、非エリート（サブ）の道を歩まざるを得なかった貝島の心の支えとなっていたものがあるとすれば、それはこのような出世観ではなかったろうか。遠い昔に世俗的な輝かしい栄

光とは縁を切ったはずの貝島の中にも変形されたエリート意識が息づいていた証拠に、沼倉の「善導」に成功したと思った彼は「やつぱり自分は小学校の教師として何処か老練なところがある」と自己満足に耽っていたことを指摘しておこう。

とはいえ、もちろん貝島が「金次郎主義」の信奉者であったという確たる証拠があるわけではない。修身教科書に登場する二宮尊徳像にはいくつかの変遷があり、この作品が発表された大正七年は国定三期教科書の時代に当たっているが、そこに登場するのは二宮尊徳ではなく、二宮金次郎であって、まさしく「金次郎主義」が喧伝されていた。ただし貝島は「金次郎」ではなく「尊徳先生」と呼んでおり、その点からいえば「金次郎主義」の提唱者であったか断定はしにくいところである。大正七年現在三十八歳になる（明治十三年生まれ）貝島自身の小学校時代は明治二十年代。このときは検定教科書の時代に当たり、まだ名称も「尊徳」の場合が多く、国定教科書のように「金次郎」に統一されてはいなかったので、その記憶が貝島の頭から離れていなかったとも考えられる。そこではむしろエリートとしての二宮尊徳――功成り名を遂げた尊徳を奨揚する「尊徳主義」が唱えられていたはずである。[14]

だが、いま確かなことは「尊徳主義」であれ「金次郎主義」であれ、最終的な目標に違いはあるものの、ともに勤勉や倹約が美徳とされているが、貝島はまさにその「節倹」の大切さを説き聞かせようとしていたときに話を中断させられ、怒りを爆発させていたことだ。これは貝島に対する冒瀆を意味する。「節倹」という美徳を至上命題とする人生設計はほかでもない、貝島自身のものであったからだ。七人の子どもと妻さらには老母を抱え、つつましく生きねばならなかったのはもちろん、そもそもM市へ移住してきたのも倹約という生活規範を体現するためだったと見られるのである。東京生活を切り上げようと思い立ったのは「生活難」もあるが、勤務校の生徒たちは中流以上の家庭の子どもたちがほとんどで、その中に混じって自分の子どもたちが「見すぼらしい、哀れな姿」をしているのが忍びなかったからだと貝島は告白している。

自分たち夫婦はどんなに尾羽打ち枯らしても、せめて子供には小ざつぱりとしたなりをさせてやりたかつた。何処其処のお嬢さんが着て居るやうな洋服が欲しい。あのリボンが欲しい。あの靴が欲しい。夏になれば避暑に行きたい。さう云つて子供にせがまれると、一と入不便さが増して来て、親としての腑がひなさがつく〴〵と胸に沁みた。

移住の隠れた目的が、放っておけばどこまでも肥大してゆくわが子の欲望の抑制にあったことは間違いなさそうなのである。

こうしてみると、貝島が修身の時間になるとことさら厳格に振る舞っていたことの裏には、修身がそもそも近代の教育制度の下でイデオロギー教化の特別な時間と位置づけられていたことのほかに、個人的な事情が介在していたと推測することが可能だろう。貝島が語る二宮尊徳像には、禁欲を美徳として今日まで生きてきた彼自身の心情が

仮託されていたのである。

以上の考察を踏まえると、二人の「ショウキチ」の役割交換の象徴的意味合いが見えてくる。修身の授業中にもかかわらず、貝島の言に逆らってまで沼倉への忠誠を表明したとき、端的にいうと子どもたちは価値観の転換を宣言していたのだ。沼倉が部下たちに突きつけた問いは、禁欲を美徳とする貝島の生き方を選ぶか、欲望を解放する自分の生き方を選ぶか、というものに等しい。その問いかけに子どもたちは明確に答えている。貝島の生の方法が未来のために〈いま〉を抑圧するものであるとするならば、子どもたちは〈いま・ここ〉に徹底して生きようとする沼倉の価値規範を選択したのである。禁欲原理から快楽原理への乗り換えといってもいい。いずれにせよ、子どもたちははっきりとした自分の意思と顔を持ちはじめていたといわなければならない。

Ⅳ

「沼倉共和国」の市場は、子どもたちが快楽原理にしたがって消費の時間を自由に享受できる一種の祝祭空間であった。そこでは親の経済力とは無関係に、つまり現実の時間を捨象して〈いま・ここ〉において現出する〈モノ〉の快楽に身を委ねることが可能である。もちろん、これは〈モノ〉の豊かさを真の豊かさと思わせる仕掛けでもあって、詐術といえないこともない。すくなくとも、たとえば啓太郎のような貧しい家庭の子どもの場合、貧困からの脱出の実現を仮象の〈モノ〉の豊かさにすり替えられている。その意味では問題の本質をずらしただけに終わっているのだ。だが、消費文化とはそうしたものであり、その表層文化としての消費が大きく花開いたのが大正時代の特徴ではなかったか。「小さな王国」の時代背景というと、米騒動前後の逼迫した社会情勢にばかり注目が集まるが、消費文化の成立というもうひとつの時代相にも目を向けておく必要がある。

大正時代は大量生産・大量消費という市場システムが形成された時代である。その本格的な始動は関東大震災からの復興を待たなければならないが、活発な市場開拓の動きはすでに明治期からはじまっており、市場を中心とした経済の論理が社会のさまざまな局面に顕在化しだしている。

その中心的役割を担ったものの一つが百貨店であったことはいうまでもあるまい。呉服店からの脱皮をめざす百貨店が積極的に打ち出した経営戦略としての流行づくりについて、初田亨『百貨店の誕生』（三省堂、平5・12）は次のように意味づけている。

流行は人びとの購買意欲を促し、消費という人びとの行為を誘発することによって、産業革命が可能にした大量生産された製品に流れの環をつくり出し、製品（商品）の再生産を生み出すことを可能にしたのである。近代社会の中で百貨店は、流行をつくり出すことによって、結果的には大量生産の一翼を担い、産業を発展させる大きな役割を演じることにもなったのである。百貨店は消費を演出することを通じて近代を推進したといえよう。

百貨店が消費への誘導を企業戦略の主眼に据えていたことが明らかだろう。流行を作り出すことで百貨店は人びとを、なかんずく都市中間層といわれる人びとをターゲットにして消費の場に引きずり出そうと画策していたのである。吉見俊哉が指摘しているように、多くの民衆はすでに、博覧会や勧工場という装置によって「歩きながら商品を見較べ、そのなかに『新しさ』を発見し、またそうすること自体を楽しんでもいくといった、『見る』というまなざしの経験」[15]をしている。しかも大正以降の博覧会が「消費の場に対してモデル的な役割」を果たしていく傾向を強めていたとなれば、百貨店は狙い通りの成果を上げることができたはずであろう。さらにいえば日本における広告が急速に近代化され、量的に増えた時期とも重なっていた。人びとの中にある潜在的欲望を掘り起こすことで成り立っている広告が夥しい数量で生活の中に入りこんでくるのである。人びとが消費者として組織されるのは時間の問題だったのだ。柏木博はこうした事態を「工業生産体制の拡大によって産出された夥しい商品の群れは、広告を介して人々の欲望の対象となるべく身構え始めたのだ」[16]と説明している。

ところで、いま重要なのは、百貨店を中心とする消費の拡大戦略の対象が大人にとどまらず、子どもにまで拡げられていたことだ。神野由紀『趣味の誕生――百貨店がつくったテイスト――』（勁草書房、平6・4）によると、明治末から大正期にかけて三越では「『児童』というテーマは、『流行』とともに避けて通ることのできない重要な関心であった」という。明治四十一年三月に「子供部（児童用品部）」を新設し、翌年には巌谷小波を小児部顧問に迎え、子どもに高い関心を示していた三越は、明治四十二年四月に旧店舗跡地で第一回「児童博覧会」を開催している。〈じどう〉ではなく〈こども〉と読ませるこの「児童博覧会」は大正四年までに計七回、毎年春の一大イベントとして開催されており、博覧会の成功に力を得た三越は常設の組織である「児童用品研究会」まで設立していたというのだ。その力の入れようがわかろう。目的はいうまでもない。子どもを通して親たちを取り込もうというのだ。そのためにまず、子どもたちに享楽主義的な商品文化の洗礼を受けさせる作戦だったのである。

子どもに目をつけたのは、もちろん百貨店ばかりではない。電鉄会社や新聞社など大量消費社会の形成に貢献した組織のすべてが子どもを視野に入れ、あるいは照準を合わせていたと見ていいだろう。大正時代は子どもの発見が行われた時代であったといわれているが、市場の論理が発見したそれは〈消費者としての子ども〉にほかならなかったのである。

このような時代状況に「小さな王国」という作品を置き直してみると、そこで繰り広げられていた子どもたちの消費行動は特異でも、例外的でもなかったことがわかる。彼らは時代の流れに身を任せていただけではなかったのか。比喩としていえば、とりわけ沼倉は地方都市にいながら時代に対する鋭いアンテナを持った少年だったのだ。はじめに沼倉を〈恐ろしい子ども〉と評しておいたが、訂正しなければなるまい。子どもたちの潜在的欲望を顕在化させ、消費者として組織し

た沼倉は、まさしく時代の申し子であり、時代を象徴する記号的人間だったと……。

「小さな王国」から六年後の大正十三年、谷崎潤一郎は『痴人の愛』を世に問う。そこに描き出されたのは凄まじい物質欲に取りつかれたナオミと、その消費の誘導に自らはまっていく河合譲治の姿であった。都市生活者の消費文化がもはや押し止めようのないものになっていることを示唆しているのだ。関東大震災以前の「小さな王国」では、まだ倫理的防波堤としての貝島が存在していたが、その影すら見ることはできない。それが貝島が体現していた努力型・禁欲型エトスのゆくえでもあったのである。いずれにしても、沼倉からナオミまでの距離はそれほど遠くはない。ナオミと「沼倉共和国」の子どもたちの成長した姿がオーバーラップするのである。

注

(1) 宗像和重「谷崎潤一郎『小さな王国』」(昭60・10「国文学」)

(2) 小林幸夫「『小さな王国』論――二人の〈しやうきち〉――」(昭61・12「作新学院女子短期大学紀要」第10号)

(3) 「子どもたちの変容――近代文学史のなかで」(昭60・10「国文学」)

(4) 『谷崎潤一郎の文学』(中央公論社、昭45・7)所収。

(5) 玉川学園女子短期大学紀要「論叢」第18号(平6・3)

(6) 注(1)に同じ。

(7) 小林幸夫は前掲論文において、沼倉によって実現した交換経済体制を「ユートピア社会の出現」として評価している。

(8) 前掲論文、注(5)に同じ。

(9) 『別冊太陽　子ども遊び集――明治・大正・昭和――』(平凡社、昭60・3)参照。

(10) 『値段史年表』(朝日新聞社、昭63・6)参照。

(11) 注(1)に同じ。

(12) 「『立身出世主義』の構造」(『現代日本の心情と論理』筑摩書房、昭46・5、所収)

(13) 竹内洋『日本人の出世観』(学文社、昭53・1)

(14) 修身教科書における二宮尊徳像の変遷については、竹内洋『日本人の出世観』を参照した。

(15) 『博覧会の政治学』(中公新書、平4・9)

(16) 『近代日本の産業デザイン思想』(晶文社、昭54・9)

なお、テキストは『谷崎潤一郎全集　第六巻』(中央公論社、昭56・10)を使用し、旧字は新字に改めた。